

史學雜誌第拾貳編第十號

通編第四百十三號

明治三十四年十月十日

論說

言語と史學

(明治三十四年六月廿三日公開講演)

坪井九馬三

言語と史學と云ふ至つて空漠な題でありまして何でも言へるやうであるけれど成りたけ要點を摘みまして言はねばならぬことだけ言はふと思ひます。言語は史學は如何なる學問であるかと言ふことを今さら説明する必要はないかと思ひませぬが言語とは何かと申しますと言語は即ち言葉である言葉と云ふと文字とは違ひます漢籍ばかり讀んでおいでになるお方は言葉と言へば即ち字のことだと思つておられる方があつたらうが決して左様でない字は言葉を表はす道具でありませぬ尤も漢語におきましては文字が同時に言葉であるかの如き外見があるから

(二)

してチヨントさう思ふ支那人は學問が出来ると字を知つて居ると全し様に思て居るがこれは甚だ間違た見解である文字はどんな文字でも宜い換字でも書文字でもろちま字でもぎりしむ文字でも宜い何でも宜い皆何れも言葉を表はす爲めの道具でありますが其道具に據つて表はす所の言葉が大切であらます現に場合に依つては文字がないことがあります未開の時代未開の社會に於ては言語を表はす道具がありません云ふ場合には文字が無くつて言語があるばかりであります言葉と云ふものは確に史料の一つであります史料と言ひまするのは昔の名残りのものであれば何でも史料であります昔の物を偽作したものは史料とはならぬ是は古物をまねたもので本物でありませぬから役に立たぬが昔の名残りの眞ものは皆史料であります天文地理もさうでありますが史料として使ふには當時の姿に引直して見なければならぬことが屢あります是等は専門學科であつて其方をやらなければ出来ぬのであります唯空で考へても出来ない又言葉は已前の古い言葉でありますれば確かな史料になりません國が開け社會が進んだ後に於きましては史料の大部分は書籍の姿になつて來て關係者が自ら筆を執つて書きて置いたもの即ち日記實際の往復の文類また其他民間の

(三)

はもやまの語或聞書きのや方な種類でありますが多くは書類の姿になつて居る其處で近頃大學で編纂して居る大日本史料を見ましても古文書や古日記即ち古い日記や又其時分の色々の聞書きが澤山に集まつて居ります何れの國々へ行きましても史料は皆さうであります……皆日本文でありますといつらんすいたりあにも各々それ／＼の言語を有つて居るいざりすに行ははいざりす文で或はらてん文で書いてある中には餘所の國で書いたものもありますが重んじ自國人が書いて居りますそれ／＼の國へ行くと皆左様であります其れでありますからして餘程國が進み社會が開けて居る以後の歴史の材料は重んじ書籍に文章を以て綴つてある文章を讀碎く力がなければ何でも解釋する力はない其處で先づ日本の歴史を明にしようとするならば昔の日本人の用ひた言語文章を充分に解釋する力がなければならぬ是はいづれの國民も悉くさうであります其處て是等の歴史を悉く知らうと思ふならば必ずそれ等の言語に通曉しなければならぬ字引と首引の姿では到底史料を讀むことは出来ませぬ地理にしても古の地理に引直す方の力がなければならぬ總ての史料が皆さうでありますから新聞紙を讀むつもりで史料を見ては分るものではさら／＼ない我々が日々使つて居る

## 論說

言語と史學

第十二編一一三八

言葉で耳慣れて居る爲に何とも思はぬが考へてみれば中々六ヶ敷い言葉が澤山あります字はどんな字を書くかかまはぬとしても言葉が餘程むづかしいまして段々遡つて行く程むづかしい字引と首引きして判ると云ふ程のは家でいふならば凡そ玄關附位のものでそれより以内は判りませぬそれより以内を讀むと云ふのは何の事であるかといふと見解を下すといふと全し事ていはゆる眼光紙背に徹ると同じでありますそれだけの事がなければ史料は讀めぬのであります又玄關より内を覗くことが出来ぬのであります日本語でも中々容易の業ではありませぬ言語と史學との關係は根本底の關係でありまして知つて居つた方が間に合ふと云ふやうな考では決していかな餘程基本底の智識を要する次第であります言語は附帯でないと云ふことを證明致しませうが例へば極て簡単な言葉から言つて見れば立食と云ふことがある知れ切つた言葉であるが書いて見るならば斯うであります(立食是は御承知の通り立つて喰ふ所から立ち喰ひとした立つて喰ふ段は同じでありますが實際に意味が違ふ立食と云ふのは然るべき紳士方が集つて然るべき料理があつて高尚なる談話なげを爲すと云ふ主意を含んで居る立ち喰ひと言つて雅意の籠天猷羅の屋台店の前に立つて喰ふと云ふのは違ふ

是は字引を見ても斯んな差別は書いてない又御前と云ふとがある御前と申すのは華族方の家來共が主人を呼ぶ所の言葉であります即ち字音で讀んだ場合であります之を訓で讀むと一個人が召使の者に向つて呼ぶ節に言ふ言葉であります是も字音と訓讀とて違ひます遡つて考へて見ますればこの字音も訓も昔は男でも女でも總て若い者を呼んだ言葉であります袈裟御前もある六代御前もある玉藻の前もある若い者の總稱であります今の御前と大變違ひます此差別も字引に書いてないそれから又同じやうな言葉であるが容易いものから言つて見れば茲に斯う云ふのがあります御上御上と云ふことは今も昔も使ふが一國の主治者を指して御上と言ふ即ち政府と言ふ意味になります其處でありますから天皇陛下を御上と申すのであります所が今度ホツクリ返して上を上へ持つて來て……上様と云ふと一軒の妻君であります又上様と云ふと尋常取引の上に依頼されたる者に向つて言ふ言葉であります是も字引には説明してない是等は極く簡單な例であるもう少し込入つた例で申せば奥と云ふ言葉があります是は地理でいへば僻遠の地のこと奥六郡と言ひますると今の巖手縣青森縣のこと又奥蝦夷も奥南蠻もあります……奥と云ふは一軒の邸にて差向き奥向きと其所謂奥向

(六)

きの奥でありまして華族方が自分の妻を奥と云ふ是は奥に居るから奥と云ふが様を附けると妻君であれば誰れ彼れの差別なしに今の使ひみちでは奥様であります様を變へて方にすると華族方の妻君であります奥方は其夫を何と呼はるかと云ふと表とは仰つしやらぬ殿様を表と仰つしやづて然るべきでありますか所がさうは行かない殿とが御前とかいはるゝ殿は御殿であります表向が御殿を代表するので殿でも濟む其意味から來たらしいそれへ今度は様を附ける足利時代に殿様と云ふ言葉が出来ますが殿を一層丁寧に殿様と申すのであります是は一般のこととあります臣下からして主人を指して言ふ今度は様を削つて殿へ方を附けると婦人方の言葉で一般の男子を指すものであります又同じ御殿の殿の字だけでも之を濁つて一般に使ふ言葉があります皇族方でも何々親王殿と申上る場合があります何々官職何某親王殿と陸海軍では呼ぶやうであります又殿の字の下に下の字を加へて之を殿下とすると殿様となりましても豊臣太閤は自分でてんかと書かれた全時代の在留外國人などは畿内の地を殿下領の意味と見へてテシカと云つて居ます是も字引にそんなことは少しも載つて居ない又山と云ふ言葉があります山と云ふ言葉は其のの意味があります地の表面に

號十第編二十第誌雜學史

號十第編二十第誌雜學史

(七)

高く聳へたる地の窟を云ふのが通常であります少しも高きつて居らないでも木さへ生へて居れば之を山と云ふのが又通常の用方であります茲に又森と云ふ言葉があります森と云ふのは一とむらの木の固まりでありまして數町歩以上に跨つて居るものは森ではない林であります然るに森は又山を意味します殊に奥羽地方に於ては頗るこの言葉を用ひますその最も著しい例は陸前の七森嶺が七つに分れて居るから七森それから羽前の觀音森羽後の龍が森もああります山のことを森と云ふのは單に日本語ばかりではないどの地方に於きましても山のことを森と言ひます現にその時代の時代からしてさうなつて居りまするま人はらてんの言葉で矢張森と云ふ言葉を使つて居る例へばらま人の所謂 *Comana Silva* ちてんの *Silva* の本來の意味は森林であります是は今日の *Thuringerwald* …… 全軀由と云ふ程の大きいものではない即ちチェリッゲンの森であります次に *Silva Marciana* とるま人の言つて居つた山を今日は *Schwarzwald* と申す即ち黒森である又もう一つの例を舉げるならば *Gabreta Silva* と云ふ森だが今日の各々は *Bohmerwald* や *Silva* の外に *Bayerischerwald*, *Odenwald* などもあるがそれでありまから *Schwarzwald* などは黒森と申すのが多く擧げられる又譯名についても

論 說

言語と史學

第十二編一四二

斯う云ふ風に今申上げました通り字音と訓讀とは依りまして意味が違つて仕舞ふ場合又同じ訓讀の場合でも訓讀の仕方に依つて意味の違ふ場合又言葉の順を違へた爲に意味が違ふ場合と三つの類の實例を申したのでありますそれから交通の工合に據つて出来た言葉があります本來國の言葉でない餘所の國の言葉であるのが這入つて來て居るのがあります例へばいざりす人は牛のことをOxと申しますが牛肉のことはい何と言ひまするかといふ人の様に Rindfleisch とはいはぬ Rindfleisch に當るいざりす語は Oxmeat でありませしやうがいざりす人は決してさうは申さぬか様な言葉を使へば大笑をします第一何のことか分らぬふらんず人は何と言ふかと云ふと牛の肉は單に肉即ち La viande と言ひます單に肉といふは牛肉のことであります其處ていざりす人は何と云ふかと云ふと beef でありませす Ox はいざりす語でありませすか beef (Fr. bouff) はふらんず語であります例へばドイツ人がいざりすを占領して以來いざりすの上流社會はインペインマンチンチンといふ言葉が出来た又いざりすでは豚を Hog といふが豚肉は Pork (Fr. porc) と言はなければなせぬといふ言葉 Schweinfleisch の例へばいざりす語は

Pork 即ちいざりす語の家のことでありませす羊は sheep 是も肉は Mutton (Fr. mouton) 今のふらんず語の羊であります……馬肉狗肉猫肉などは名がありませぬ勿論食はなむだから……この肉の名がふらんず語であるのは餘程面白い事實で當時のいざりすの社會が判る肉を味ふたのは上流社會で下等社會は肉を澤山食ふ力がなかつたそこで生動物と肉の名前とは凡て違つて居る是等の事情から又面白いのがある鹿はいざりすの言葉で deer (Deutsch. Uhier 動物) と云ふが肉のことを Venison (Fr. Venison) といふ deermeat とはいはぬこの鹿の肉のことはふらんず語にて特別な名がある即ちウネーソンてふらんず語の鹿の肉のことてふらんず語でも鹿は動物と肉と全く名が違つて居るそれでありませすから鹿は他の場合とは違ふのであるこのウネーソンはちてん語から出て居て狩くもの獲物といふ意味であるさうして見るとふらんずの昔の社會に於きましては狩くものをすべには鹿を目的物にして居ることは此言葉でも判ります日本という言葉にもこの例があります古言では肉をシハと申しますが又所謂モハンマも野猪もシハでありますこれはあらゆる肉の中でモハンマを最も賞翫いたしましたかち遂に野猪までをシハと申したので當時の狩りくらの目的動物は常にこのまゝであつたのですふらんず

## 論 說

言語と史學

第十二編二四四

ては鹿、日本では鹿の志である然しふらんすて肉といへば牛肉のこと、日本ではシ、といへばモ、ンシであるのは日本の社會が當時牛肉を食ふのをやかましくいつたからだ、即ち國民心理の違ふ所である……いざりす語の場合は外國の交通の結果さうなるのであります、又國民が嗜好するもので面白いのがあります例へばいざりす人が通常飲みますポルトワイン……赤葡萄酒……をさやう申すのはばるとがるに大きな港場ではるといふ所がありまして内地の生葡萄酒を盛に買占めいざりす人は資本を卸して其處の葡萄酒を集めて樽詰にする此處から酒が出るからいざりす人は赤葡萄酒をポルト葡萄酒と言ひます日本には又ポルトの油と云ふのがあります近頃の言葉でいふオリーブであります今申すポルトの港から來たので名を附けた又ラシヤといふのはばるとがるの言葉で織物の名である絹織のも毛織のもあるのですが日本では毛織のラシヤ許り輸入したと見えて今のラシヤと成りてまゐりましたこれ等は社會心理なり國の地理なりの關係からして來ます差別でありますすべて上に申すやうなことは普通の字引を見ましても見えない斯様に言つては字引が不完全であると云ふ御非難が、*あつたまじやうがそれなむづかしい御注文でありまして成程幾つかお求め*

應ずることを出來る現在の日本必字引は不完全に相違ありませぬがあれも是も至れり盡せりと云ふ字引は到底ありませぬそれでありますから字引を一向に依頼して學問をせうと云ふことは間違つて居る表通一と通りは判らうが本當に知らうと思へば字引では間合はぬもう少しむづかしい例を擧げて見ませう例へばさむらひと云ふ古い言葉があり是には三通りの意味があります本來侍所といふがありまして一の邸に出入して居る主人の側に出て居る者の詰所であります今日出入りの者と申すのと先づ類似のものでありましたが今出入りと云ふのは印半天を貰つて喜んで居る者で少し違ふて是は決して侍とは言はぬ侍所の伺候人は皆家人家來で元來は奴僕即ち賤民であつたのがその業とする所が軍事であつたゆゑに一變して武士のことになつて來ましたそれから段々意味が變つて來て比較的後世になつて遂には一種高尚なる所の徳義を有つて居る品格の高い人物と云ふ義になつて仕舞つたこの侍のことをいざりすの言葉で Knight といひます、ふらんす、いたりあ、いすばにあ、ばるとがるの言葉では馬乘と申します、えうろばに於ても元來は家人家來のこと、奴僕即ち賤民でありました然しえうろばには侍所はありませんでしたこの事は Knight (Anglos. Knight) と云ふ言葉が善

論 說

言語と史學

第十二編 一四六

く示して居ります但し今の讀方は滅茶々々の當音であります尤も奴僕より騎士  
 騎士より侍紳士となつて來た譯は長いから申上げませぬが……兎に角昔のま  
 うろばの軍隊には騎兵と云ふ者がなかつた歩兵ばかりろま人の方もさうなら  
 ばけるまに人の方もさうであります悉く歩兵であります尤も大將株は馬に騎つ  
 て居ります其處で馬は貴重でありまして餘程身代の大きな者でないと自分の家  
 に馬は養へない然るにサラケン人がやがてやつて來たこのサラケンは元ざりし  
 め名のサラケンスであります東方と云ふ義らしい……サラケンが段々えうろ  
 ばに這入つて來たので歩兵ばかりで成立つて居る軍隊が騎兵に當るから勝てぬ  
 幸にして喰止めるだけは喰止めたがどうしても騎兵が必要であります急に騎兵  
 の編制に掛つたが味く行かない昔は出兵する者は武器から何から皆自辨であり  
 ます一個人に執つてはつらい話で况や今度は馬も買はなければならぬと云ふ始  
 末でしやうがないから政府で手當をやつて馬を買はしたこれが所謂 *Knighten*  
*etc.* の起りてありますそこで奴僕が一變して世襲の騎兵となつた騎兵は即ち馬  
 乗でありますこれがどつどつやふらんすやの言葉で侍紳士を馬乗と申す起りて  
 應ず所が段々廿五世紀十六世紀當りになつた *night* と云ふ言葉が自然に

すたりまじしを代りた *Gentlemen* と云ふ言葉が起つて來た *Gentlemen* 是と譯は  
 侍であります家扶執事のやうな者で屋敷の職務を執つて居る者を *Gentlemen* と云  
 ふ *Gentlemen* の本來の義を申せば矢張高尚なる人物と云ふことであらう語原か  
 ら云ふならば即ち理想上の紳士である……世の中は澆季であつて昔から世は  
 澆季であつて黄金世界は曾てあつたことがない古今何時でも何處でも澆季であ  
 ります兎に角今日普通の言葉の意味では紳士 *Gentlemen* とは本家本元のいざり  
 すに於てさへ大變意味が違つて來た即ち金をハツ／＼と使つて奇麗な着物を着  
 て始終アラ／＼駐けずり歩いて無暗と交際を求める才子連のことである假令金  
 を有つて居つても使はぬてはいけないそれが出來なければ *Gentlemen* ではありません  
 せぬ其處で同じやうな例證ですがあうすとありあの都では大學であらうが中學で  
 あらうが小學校であらうが苟も人に教へて居る者と見れば *Herr Professor* であ  
 ります又學問をして居る人と見るならば僅に一冊の書を読んだ者でも即ち學生  
 生徒ならば猫も杓子も *Herr Doctor* であります又學問をして居るとも見えぬ唯  
 金を使つて遊んで居ると思へば *Herr Baron* であります高尚なる名稱が段々下  
 落します私の思ひますには言語が加様に下落するのは畢竟社會が進みました記

論 說

言語と史學

第十二編 一四七

## 論 說

言語と史學

第十二編一四八

である社會が進めば貧富の懸隔が甚しくなる虚名を欲することが甚しくなる華奢淫靡の風が甚しくなる……どのつまりは一全のともだをれにやつて百事休するのであるがそこで客商賣の面々がこの人情の弱點に付込んで一文でも多く志ばらうといふ生存競争からしてかうなるのである……斯う云ふ風に到底字引を讀んだ所が分らない何とかして言葉の意味を取らなければならぬ或は一つの意味を取つても全躰が分らぬ……表面の意味は分つても何と解釋して宜いか我々は非常に窮する事があります適當に解釋し見解を下さうと思ふならば色様の學問をして色々様々の方面より研究をして見なければ分らぬものであります終りに申し上げますが近頃大學で史料を編纂して居られるがあれには重みに書籍が集まつて……史料の性質は昔から傳はつて居る書籍であるがみすみすの偽物では困りまするが左もなければ昔から傳はつて居るものであれば何ても宜いどの史料がどれだけの直打があるか或は直打があるものにしても約まらぬ事が這入つて居りはせぬがどれか佳い悪いと云ふことは讀者の考てありますそれでありませうから史料に書いてあるのは確なことも間違たことも色々様々あります總て歴史の事實はその起つた時の證據物件に殘つて居ります何れ

も彼でも傳つたものならば役は立ちませう偽物でもそれを作つた意思が分りますれば其入の時代の社會心理が分ります大學の史料は如何はしい場合には断つて有るやうであります或は又餘り甚しい俗説であると何々の説として断つてあるやうであります断つてなくとも事實如何な説が雜つて居りませう世の中には史料が出來たら歴史は編纂するに及ばぬと云ふさう云ふ觀念を有つて居る人があるかも知れない是は本來史料の何たるを知らぬからなので……史料は殘つて居るものは何でも之を整理して出すと云ふ主意……斯う云ふことは國家がやらなければ出來ないと思ひます然しその上の史料の考證史料の見解などは國家の思ひも寄らぬ事でそれこそ民間史家の天職であると思ひます大學の史料はこの點に於て少々老婆心に富み過ぎて居ると私は思ふのであります諸君はその親切を御悦ひなさるでシヤウが……兎角諸君の識見が物種であります要するに先刻申す通り紙の背までも目が透ふるやうに先づ言語の研究をなさいましてそれから徐ろに考證見解修史と順を逐つて御掛りなさるので諸君の御前途は頗る遠達のことでありませう